



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

サウジアラビア：バンドル総合情報庁長官の解任

4月15日、アブドゥッラー国王は、バンドル・ビン・スルターン総合情報庁長官を解任する旨の勅令を発出した。後任には、同庁副長官のユースフ・ビン・アリー・イドリーシー（大将）が就任する。

バンドルは、初代国王の孫にあたる「第3世代」の王族であり、故スルターン皇太子の息子。1949年生まれで、1983年から2005年までの22年間、駐米大使を務めた。2005年10月、国家安全保障会議（NSC）の事務局長に就任し、2012年7月にはNSC事務局長を兼務したまま、サウジアラビアの諜報機関である総合情報庁の長官に閣僚級として就任した。総合情報庁長官時代にはシリア問題について担当し、シリア反体制派への積極的な支援を実施したとされている。2013年10月には、米国のシリア政策への不満から「関係の大きな見直しもありうる」と発言するなど、シリアやイランに対するタカ派として知られていた。

バンドルは2014年初頭から、米国で肩の手術を受けた後、療養のためモロッコに滞在していた。2月中旬には、『ワシントン・ポスト』紙を始めとする各紙から、バンドルがシリア問題から外されたのではないかと報道がなされ、ムハンマド・ビン・ナーイフ内相がシリア問題を所管するようになったとされた。しかし、3月25日付の『アル・アラビーヤ』紙で「(バンドルは)一週間以内に帰国し、業務を再開する」と報じられたように、3月下旬から4月上旬にかけてはバンドルが復職する見込みであるとの報道が出回った。今回の勅令により、バンドルの人事問題についての憶測には決着がついたことになる。

勅令には、解任の理由を「本人の希望」としてあるが、要職からの解任人事では常に挿入される定型句であり、実際の理由は明らかではない。事前に憶測の報道が出回ったように、シリア問題について過激な政策を主張しすぎたことがバンドルの解任につながったという見方が強いが、王族内の権力争いの結果と見る向きもある。なお、バンドルは国家安全保障会議の事務総長も兼任しているが、今後もこちらの役職にはとどまるかどうかはまだ不明である。

さらに、バンドルの解任により、サウジアラビアの対シリア政策が転換するのではないかと予想する声もあるが、先述のとおり、バンドルが海外に出ていた2カ月間、シリア問題はムハンマド・ビン・ナーイフ内相が担当していたとされている。この間、対シリア政策の路線に大きな変化は見られなかったことから、今回の人事がどれほど影響を与えるかは慎重に見極める必要がある。

(村上研究員)

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799